

(懸賞論文)

聖書のらい
その翻訳をめぐる考察

大嶋
美枝子

目次

問題の所在

「^{聖書}のらい」の翻訳
「^{聖書}における」の
「^{聖書}」

結論

注

歴史的に「聖書のらい」は長い間ハンセン病と混同されてきた。しかし、もともと「聖書のらい」はハンセン病という一つの病名を指す言葉ではなく、総称的な広い意味を持つ言葉であった。それがなぜ一つの病気を指すようになったのか。これには聖書翻訳の問題と医学上の混乱が微妙に絡んでいる。本論文では、「聖書のらい」がどうしてハンセン病と混同されていったのかについて、その過程を追う。さらにこれまで「らい病」と訳されてきたヘブル語のツァーラアト (צָרַעַת) が神に打たれた病氣として受け取られ、罪のたとえとして扱われたことを考察し、ギリシア語のレプロラ (λεπροσ) とともに聖書学的に検証する。

最近になって「聖書のらい」の翻訳が見なおされ、一九六一年に New English Bible の脚注に「Leprosy (レプロシー) は現代のハンセン病のことではない旨が記された。以後「聖書のらい」は「恐ろしい皮膚病」とか「伝染性の皮膚病」などの語に置き換えられるようになってきた。このような最近の動向もふまえて論述する。

1 「聖書のらい」の翻訳

「聖書のらい」がどうしてハンセン病と混同されるようになったのか。それは翻訳におけるどの過程でそうなったのか、ヘブル語からギリシア語、さらにラテン語、英語その他と翻訳されていった流れを述べ、実際に翻訳聖書を開

いて検討する。

1、翻訳の歴史(一) 諸外国語訳

聖書は文化や言語を異にする共同体のために、さまざまな言語に翻訳されてきた。日本聖書協会によれば、一四五〇年以前で三十三種の言語の翻訳があったと言われる。^① 一八〇四年に英国聖書協会が組織された時点で、六七言語の部分訳と全聖書の翻訳が完成したものが三九言語とされる。一九九一年二月末の統計では、一九七八言語に翻訳されており、その内、新約聖書だけのものが七五八言語、聖書全体の翻訳が完成しているものは三二二言語に上っているが、さらに六〇八言語が作業中だと言われる。^② 以下「聖書のらい」に関わる例を取り上げる。

ギリシア語訳(七十人訳)

ヘブル語聖書が最初に外国語に翻訳されたのはギリシア語の「七十人訳聖書」においてである。離散したユダヤ人のために聖書が、当時使われていたギリシア語に翻訳された。それは紀元前二五〇年、エジプトの地中海沿岸の都市アレキサンドリアにおいてであった。その中で、問題となるヘブル語のツァーラアト (צָרַעַת) にはギリシア語ではレブラ (λεπρος) という語が当てられた。^③ ツァーラアトは、人間の皮膚、布や皮、家の壁が表面的に損なわれた状態の総称を表わす語で、ヘブル語独特の祭儀的意味を含んだ語であるが、翻訳に際して選ばれたギリシア語のレブラは、うるこ状とか、かさぶたのある状態という意味をもっていて、物体や皮膚の表面に見られる汚れ、しみ、あざ、かさぶた、ふけ、斑紋などを表現する語である。^④ ツァーラアトもレブラも表面がそこなわれた状態を表す言葉であった、一つの病名を指す言葉ではない。聖書のツァーラアトを検討する段落で述べるが、いわゆるモーセ五書の成立する時代を批評学に百歩譲ってバビロン捕囚(前五七五〜五三八年)の頃とみる仮説を採るとしても、考古学的発掘調

査の結果から当時ハンセン病は存在しなかったと言われる。⁵⁾ともあれ、ツァーラアトは当時のギリシア語で医学的また祭儀の意味をもたない総称的意味のレブラと訳されたのであった。

ハンセン病が地中海沿岸都市に侵入したのはアレキサンダー大王(前三五六～三三三年)のインド遠征以後だと言われている。医学の祖といわれるヒポクラテス(前四五〇～三七〇年)をはじめ当時の医師たちは、ハンセン病のことを「象皮(Elephantiasis)」と呼んでいた。⁶⁾もしも七十人訳の訳者たちがツァーラアトをハンセン病だと考えていたなら、レブラではなく、Elephantiasisと訳していたと思われる。皮膚の状態を表わすギリシア語のレブラがどうしてハンセン病を指すようになったのか。その混乱の発端はアレキサンドリアの医師ガレノスと思われる。

ガレノス(一三一～二〇二年)が書き残したものに、「象皮病は、一五〇年頃、地中海沿岸地方では、よく見られる疾病であった」と記録しているが、その象皮病の中の皮疹を主とする型のものをレブラと呼んだために、象皮病そのものがやがてレブラと称されるようになっていったのである。⁷⁾この頃はローマ帝国が制覇した時代で、ギリシア語に代わってラテン語が普及していて、聖書のラテン語翻訳が試みられるようになった。

ラテン語訳(ウルガタ)

ヒエロニムス(三四〇頃～四一九年)は四〇五年にラテン語聖書を訳出した。他にもいくつか訳されていたラテン語訳に代わって、『ウルガタ』(普通の、一般の、公認の)の意)として社会に認められたのは七～八世紀になってからであった。『ウルガタ』が正式にカトリックで公認されたのは一五四六年のトレント公会議においてである。⁸⁾「ヒエロニムスは翻訳にあたって、ヘブル語の *שָׁרָיָה* をギリシア語に倣って *σαρρα* という言葉を「借用語」として、そのまま翻訳に使用した」⁹⁾と言われる。

四〇五年といえば、ガレノスの死後二百年を経ているが、レブラが象皮病と称されていたハンセン病そのものを指すというまでには至っていなかったものと思われる。だが、三八〇年にコンスタンチノーブルの大司教ナジアンソスのグレゴリウス(三二九～三八九年)が、ハンセン病者の救済を説いた説教にはハンセン病を指す「エレファンティアジス」と「レブラ」が既に同意語として用いられていたことを示していることである。¹⁰⁾

次の問題は、ヒエロニムスが、イザヤ書五三章四節において、ヘブル語の *נָגַף* (を)「(神に)打たれた」と訳すべきところを「われわれは思った、彼はレブラの如くなったのだ」と¹¹⁾と、旧約本文にも七十人訳にもない語を『ウルガタ』に付け加えたことである。これは後年、苦難の僕の姿をハンセン病患者として解釈されていく結果となった。このラテン語訳の『ウルガタ』は、ローマ・カトリック教会の公用聖書として広く使用され、各国語に翻訳される際の基準となったので、その影響は大きい。

英語訳

英語訳として古いものは、ウィクリフ(一三一九～八四年)が『ウルガタ』を基に一三八二年に翻訳したものが知られている。ティンダル訳は一五二五年にギリシア語訳から英訳された。三百年以上も英語圏で広く用いられた欽定訳(KJV)またはAV)がティンダル訳の改訂訳として発行されたのは一六一一年である。これらはいずれも *Leprosy* と訳している。¹²⁾¹³⁾近年の英語聖書の多くも *Leprosy* のままである。Revised Standard Version¹⁴⁾、New English Bible¹⁵⁾、American Standard Version¹⁶⁾、モファット訳¹⁷⁾も、ともに *Leprosy* と訳している。

英国人医師で、国際らい学会事務局長のスタンレー・G・ブラウンが著わした『聖書の中の「らい」』によれば、中世英語で「レプロシー」は、人間、動物、植物の病気、農作物にはびこる菌、しめった穀物に生えるかび、家畜の疥癬などを表わす言語であったとされる。¹⁸⁾しかし、医学名として定着したこともあってレプロシーはハンセン病をさす言葉となった。

ドイツ語訳

ルター訳ではツァーラアトもレプラも Aussatz と訳されている。⁽²¹⁾ この語は独和辞書でみると、「Lepra【医】ハンセン病」とあり、さらに、「昔この病気にかかった者は共同体から aussetzen「遺棄」されたところから」⁽²¹⁾ きていと記されている。スペイン語訳、ポルトガル語訳はどちらも lepra となっている。⁽²³⁾

中国語訳

中国語の聖書は旧新約とも簡体字では「大麻瘋」、⁽²⁴⁾ 繁体字では「大麻瘋」⁽²⁵⁾ と訳されている。紀元前二六九七年の中国最古の医書にはハンセン病の症状が麻痺する病気として正確に記されているので、中国にはその時代にハンセン病があったのである。宗時代の書物にはハンセン病を大麻風毒と称していた。⁽²⁶⁾

これについて『大漢和辭典』で麻の項を引くと、「麻瘋は、癩病」のことであるとされ、中華大字典から次の漢文を紹介している。「癩、麻瘋、癩病也、又名大麻瘋、病原為癩病菌」。⁽²⁷⁾

韓国語訳では旧新約いずれも ムン・ドゥン・ピョン(らい病)と訳されている。⁽²⁸⁾

新約聖書の現代ヘブル語訳ではツァーラアト(צלה)となっている。

以上、聖書のツァーラアトおよびレプラの翻訳について幾つか述べたが、百科事典で「癩」の項を引くと、それはすべてハンセン病の説明であり、各国の言葉も聖書で翻訳された言葉と同じである。癩(日本語)、lepra(スペイン語)、ポルトガル語)、leprosy(英語)、lepre(フランス語)、lebbra(イタリア語)、Aussatz(ドイツ語)、麻風(中国語)⁽³⁰⁾ と記されている。

二、翻訳の歴史(二) 日本語訳

さきに中国語聖書では「大麻瘋」と訳されていると記したが、日本語訳の明治訳を見ると「癩病」となっている。これは英語の癩病と訳したといわれているが、日本では大麻瘋と訳されたものはなく、すべて癩病となっている。

(1) 初期の私訳

聖書が日本語に翻訳されて現在残っている最初ものは、ギユツラフがマカオにおいて訳した『約翰福音之伝』と『約翰上中下書』(一八三七年)であるが、⁽³¹⁾ 『聖書のらい』は、新約では共観福音書と呼ばれるマタイ、マルコ、ルカにのみ出てくる。それらの初期の翻訳を列挙すると、S・W・ウィリアムズによる『馬太福音伝』(一八五〇年)と、B・J・ベッテルハイムによって訳された『路加伝福音書』(一八五五年)、『馬可伝』一章(刊行年不詳)がある。以上は海外で翻訳された。

日本国内において翻訳されたものとしては、J・ゴープルによる『摩太福音書』(一八七一年)、J・C・ヘボンとS・R・ブラウンによる『馬可伝』(一八七二年)、『馬太伝』(一八七三年)で、そのほか聖書反駁のための田嶋象二による『馬太氏遺伝書』(一八七五年)がある。N・ブラウンは日本語で初めて『新約全書』(一八八六年)を訳した。バチエラー訳アイヌ語新約聖書は一八九七年に成立した。⁽³²⁾

以上が初期の私訳であるが、各書が「聖書のらい」をどのように訳しているかについて詳述するには資料が乏しい。

(2) 委員会訳

明治訳新約聖書

プロテスタントの日本人牧師を含む在日各ミッションを代表する宣教師によって翻訳委員会社中が組織されて横浜で翻訳された。委員として加わった日本人牧師は、奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎、井深樞之助はブラウンを補助

した。宣教師は在日各ミッションを代表する宣教師のヘボン、S・R・ブラウン、グリーン、N・ブラウン、マクレ
ーほかであった。彼らによって翻訳されたのが元訳と呼ばれる明治訳で分冊発行の後、『新約全書』として一八八〇
年(明治十三)に英・米の聖書会社から出版された。⁽³³⁾
これらを見るとマタイ(馬太福音書)八章二、三節、マルコ(馬可福音書)一章四〇、四二節など該当の箇所
はすべて「癩病」と訳されている。⁽³⁴⁾

明治訳旧約聖書

旧約聖書は当初、東京築地において東京聖書翻訳委員会が設置された。後に横浜の翻訳委員会社中と合流して聖書
翻訳常置委員会が設置され、十二名の宣教師に日本人の委員として松山高吉、植村正久、井深梶之助が加わった。分
冊発行の後、『舊約全書』は一八八八年(明治二十一年)に英・米の聖書会社から出版された。⁽³⁵⁾

これを見るとレビ記(利未記)十三、十四章をはじめ該当箇所はすべて「癩病」と訳されている。⁽³⁶⁾ 明治訳の旧
新約全書は欽定訳を重訳したので、英語の *leprosy* を「癩病」と訳した。⁽³⁷⁾

大正改訳新約聖書

英米聖書会社は大正改訳と呼ばれる新約聖書を文語訳で一九一七年(大正六)に出版した。それには奥付けがない
が、『我らの主なる救い主イエス・キリストの新約聖書 改譯』とあり、発行は紐育・倫敦・東京 聖書協會聯盟と
ある。旧約も改訳を計画されたようであるが、実現せず、一九三〇年に明治訳と新約の改訳が文語訳旧新約聖書とし
て出版されることになった。この改訳された新約聖書でも該当箇所はすべて「癩病」となっている。⁽³⁸⁾

一九三七年(昭和十二)に日本聖書協会が設立され、聖書の出版は同協会に引き継がれた。戦後、聖書協会は、口
語訳聖書の必要から新約を一九五三年(昭和二十八)、旧約を一九五四年(昭和二十九)に先の新約と合わせて刊行

した。この口語訳は旧新約とも「らい病」と訳されている。⁽³⁹⁾

共同訳(新約聖書)はカトリックとプロテスタントが共同して動的等価翻訳方式(ダイナミック・エクイバレンス)
で訳され、一九七八年に発行されたが、実際にはあまり普及しなかった。この新約聖書では「らい病」と訳されてい
る。⁽⁴⁰⁾

続いて共同訳委員会では、一九八七年に新共同訳聖書を完成した。旧約のツァーラアトのうち、人間の皮膚に関し
ては「皮膚病」あるいは「重い皮膚病」と訳し、衣類や壁の場合は「かび」と訳されたが、新約は「らい病」のまま
であった。⁽⁴¹⁾

翻訳委員会では新約聖書の中でレブラ (*leprosy*) を「らい病」のままにしておくことについては問題とされたが、
今後の課題とされた。その一文が日本聖書協会の『聖書翻訳研究』に記載されているので引用する。

その他残されている問題は、新約との関係で、「新共同訳」のレビ記では「重い皮膚病」と訳されているもの
が、それに対応する新約の箇所では「らい病」(ルカ五の二二)と訳されていることである。これにはいろいろ
理由があるが、旧約のヘブル語 (*tsabaḥ*) は現在病理的にハンセン病と考えるとあらず、新約の引用とは厳密に
対応していないなどの問題が残されていることも確かである。⁽⁴²⁾

これを読む限り、新約の「らい病」について翻訳者間で意見が分かれたようである。ハンセン病医療に五十年携わ
ってきた『聖書のらい』の著者、犀川一夫は新約聖書のレブラをハンセン病とみなすことは適当ではないとの見解を
示している。⁽⁴³⁾

新改訳聖書

委員会訳としては福音派陣営による新改訳聖書(口語訳)があげられる。旧新約は一九七〇年に日本聖書刊行会が

ら発行された。この聖書は「原語に忠実」をモットーに訳されているが、該当箇所は「らい病」となっている。⁽⁴⁴⁾ さらに、いのちのことは社発行の『リビングバイブル』は一九七八(昭五十三)年に発行されたが、該当箇所は「らい病」となっている。⁽⁴⁵⁾ 同社発行の『詳訳聖書』(一九六三年)でも「らい病」となっている。⁽⁴⁶⁾

(3) 個人訳

個人訳として「聖書のらい」に関係のある翻訳を以下に列挙する。

永井直治の『新契約聖書』は文語訳の新約聖書で、一九二八年(昭三)に創刊されたものである。⁽⁴⁷⁾ またキリスト新聞社発行の新約聖書(一九五二年)は、渡瀬圭一郎、武藤富男の訳である。⁽⁴⁸⁾ 塚本虎二訳の福音書(一九六三年)⁽⁴⁹⁾ 岩隈直の希和对訳の新約聖書(マルコ・一九七三年、ルカ・一九七八年、マタイ・一九八九年)⁽⁵⁰⁾ 以上の四冊ではいずれも「癩病」と訳されている。関根正雄訳の旧約聖書(一九五六年)ではツァーラアトはすべて「らい」、⁽⁵¹⁾ 前田護郎訳の新約聖書(一九八三年)は「らい者」「らい病」、⁽⁵²⁾ 柳生直行訳の新約聖書(一九八五年)では「癩者」「らい病」⁽⁵³⁾ となっている。

最近一九九六年十一月に岩波書店から出版された『新約聖書 福音書』(佐藤研・小林稔訳)の補注・用語解説欄の「らいびょう・らい病(Lepra)」を見ると以下のようになっている。

原語は、七十人訳聖書ではヘブライ語の「ツァーラアト」の訳語とされており、一般には「らい病」と訳されるが、必ずしも正確な訳ではない。これはハンセン病にとどまらず、さまざまな症状の皮膚疹的病理現象を総括する集合概念、当時は祭儀的に特に「穢れた」病と見なされ、患者は強制的に社会から隔離・遮断されて(レビ三章四六参照)公けの場に出でることは許されていなかった。また、病を罪の結果の罰とみなす当時の概念の中でも、「レフアラト」は特にその典例であった(民数二二章九～一二、代下二六章二

〇)。社会的な偏見と差別のあり方が、此处での「レフアラト」と日本の歴史上の「らい病」とでは類似しているので、敢えて「らい病」という訳語にした。⁽⁵⁴⁾

このように原語の説明を加えながらも、「らい病」と訳している。

尾山令仁訳の「現代訳」(一九八三年)は訳語が統一されていない。レビ記二三、一四章は人の皮膚に関しては「伝染性の皮膚病」、衣服などは「伝染性の皮膚病のようなもの」家に関する場合は「かび」と訳されているが、その他の旧約、新約の該当箇所はすべて「らい病」となっている。⁽⁵⁵⁾

カトリックの宣教師ラゲ(一八五二～一九二九年)によって訳され、一九一〇年(明治四十三)に発行された文語の新約は「癩病」となっている。⁽⁵⁶⁾ バルバロ訳と呼ばれる口語体旧新約は一九六四年に発行された。バルバロとデル・コル両神父によって訳されたが、それを見ると「らい病」となっている。⁽⁵⁷⁾ フランシスコ聖書研究部訳の『新約聖書』は「らい病」となっている。⁽⁵⁸⁾

ギリシャ正教のニコライ(一八三六～一九二二年)はロシアから一八六一年に来日し、一九〇一年『我主イイス・ハリストスの新約』を日本人とともに翻訳した。ここでは「癩病」となっている。⁽⁵⁹⁾

以上のように、委員会訳、個人訳のほとんどの聖書が「らい病」と訳している。

先の漢語辞典で「癩」の項を引くと、病名としての「らいびょう」のほかに「くすりまけ・きず・ひぜん」⁽⁶⁰⁾ があるので広い意味もあるようである。癩という字が日本で初めて記されたものは山本俊一の『日本らい史』によると、日本書紀(二十二卷)であるという。そこには、六二二年に百濟からの帰化人のうちの一人に白癩云々とあり、八三年の令義解に白癩が悪疾(アシキヤマイ)として正確にハンセン病の症状が記されていて、ここでは伝染病と記されていて、流行したことがうかがわれる。⁽⁶¹⁾ 従って、日本では古来、ハンセン病を癩病として呼称してきた

たよつてゐる。

三、最近の動向

十九世紀に入ってツァーラアトはハンセン病ではないとする医学者が増え、聖書の脚注にその旨、記されるようになった。さらに、レプロシーを使わず、「悪性の皮膚病」(NEB)や「恐ろしい皮膚病」(GNB)⁽⁶²⁾、「伝染性皮膚病」(ZEV)⁽⁶³⁾と訳出してきた。しかし、New International Versionを見ると、⁽⁶⁴⁾「レプロシー」や「民数記五章二節の人間の皮膚に関しては「伝染性皮膚病 (infectious skin disease)」であるが、その他は旧約も新約も leprosy となっている。下の注を見るに、前者は「伝統的にらい病」へブル語のこの言葉は皮膚に生ずる種々の病気であつて、必ずしもレプロシーではない」と記されている。後者は「伝統的にらい病」の語句が除かれて、「へブル語(ギリシア語)のこの言葉は皮膚に生ずる種々の病気であつて、必ずしもレプロシーではない」と注記されている。⁽⁶⁵⁾ Good News Bible (GNB) Today's English Version (TEV) は leprosy という言語は一切使用されておらず、恐ろしい皮膚病 (dreaded skin disease) という表現が使われている。⁽⁶⁶⁾ このよつて一九六〇年代以降、「聖書のらい」に注がつけられたり、表記が変えらるよつになつた。

日本でも一九九六年三月二十七日の国会において「らい予防法」が廃止されたのに伴つて、キリスト教界では「らい」の表記を変更する動きが出てきた。そのひとつは、日本基督教団東中国教区総会(一九九六年五月)で聖書の「らい病」という語を適切な言葉に変更するよう日本聖書協会と日本聖書刊行会に提案する決議を可決した。⁽⁶⁷⁾ また、日本聖公会も、『らい予防法』廃止とそれに伴つ十全な措置を求める宣言⁽⁶⁸⁾を、一九九六年五月の日本聖公会第四十九(定期)総会の総会名で出した。この宣言文は、謝罪に続く後半に、聖書に使用されている「らい病」の名称を

「重い皮膚病」に読みかえると共に、「らい病」の用語の使用廃止を求めている。⁽⁶⁹⁾ 同様な要望はカトリック司教協議会からも四月十一日付で出された。⁽⁶⁸⁾

これらの要望を受けて、日本聖書協会では昨年十一月の委員会で変更が決定され、三月七日に変更を発表したことはさきに述べたとおりである。新共同訳だけでなく、口語訳も文語訳もこれから印刷するものについて順次変更するといつ。日本聖書協会では「重い皮膚病」という語は暫定的な言葉で将来もつと適切な言葉があれば変更も考えたい。⁽⁶⁹⁾

たしかに「重い皮膚病」ではツァーラアトのもつ浄、不浄という儀式上の意味合いは表れていない。しかし、まず善処することが必要であるとして、既に四月から発売された新共同訳の小型聖書では新約の「らい病」の個所が旧約同様に「重い皮膚病」に置き換えられている。⁽⁷⁰⁾ 新共同訳聖書で「重い皮膚病」と訳されていることについて、国立療養所・長島愛生園医官の中井栄一は、「今度は皮膚病の患者の人權に関わつてくるので、適切な翻訳が無いのなら聖書の原語のまま、ツァーラアトの方がよいのではないか」という意見であった。米国皮膚学会のカプラン氏も同意見を発表している。⁽⁷¹⁾ 筆者も同様の意見であるが、暫定的にせよ、今回「らい病」の表記が替わつたことを歓迎したい。

『実用聖書注解』の中で千代崎秀雄は、「この時の病気を らい病」と訳するのは現代の名称「ハンセン病」と同一視し、しかもこれを罪の結果と考へる偏見と誤謬を支持する恐れがあり、はなはだ問題である」として、「重い皮膚病(新共同訳)が訳としてよい」と述べられている。⁽⁷²⁾ この『実用聖書注解』の二一三、二一四章の注解には見出しを伝染性皮膚病とし、衣服・家に関しては「かび」としている。⁽⁷³⁾

ケンブリッジ旧約聖書注解は「悪性の皮膚病」と「かび」と訳しているが、⁽⁷⁴⁾ 今日では「悪性の」という場合、皮

膚癩を指す言葉として使われることが多いので、訳としてはさらに推考が必要と思われる。

日本福音同盟(JEA)では、一九九二年九月に、「聖書に記されている『らい病』は必ずしも現代のらい病(ハンセン病)と同じでないこと、また、聖書において『らい病』は罪の象徴として記されていないことを確認する文書⁽⁷⁵⁾を出しているが、「この度、『らい病』予防法の廃止に関する法律」の制定をつけて」という文書⁽⁷⁶⁾を六月二日の理事会で承認し、加盟団体に送付した。反省と決意が盛られた謝罪文である。謝罪文としては、一九九六年四月五日の真宗大谷派⁽⁷⁷⁾同年五月二十三日の日本聖公会⁽⁷⁸⁾同年七月九日の日本基督教団東中国教区⁽⁷⁹⁾に続くものである。JEAの今回の文書中、具体的には新改訳聖書の「らい病」あるいは「らい病人」の訳語を適切な語句に差し替えるように、日本聖書刊行会および新改訳聖書刊行会へ申し入れると記されている。またJEA加盟各位に、註解書、その他のものを含む印刷物の見直しを要請し、不適切な表現の修正に努めることも記されている。

二 聖書における「らい病」

以下において聖書における主な該当箇所をとりあげ、加えて、誤った解釈、注解の影響を述べる。

一、旧約聖書のツァーラアト

旧約聖書でこれまで「らい病」「らい病人」と訳されてきたヘブル語のツァーラアト(צָרַע)について、元の語源は「崩壊する」「打ちくだく」という説と、すずめ蜂か、くま蜂を意味するツィルアー(צִיִּילְאָר)を語源だとする説が

ある。⁽⁸⁰⁾

ブラウンによれば、このツァーラアトは元来アラビア語から派生した言葉で、「種を撒く」という意味の動詞ザラーラ(צָרַע)に、状態を示す接尾語アト(אֵת)が結び付き、「撒布」とか体表面に現れる「発疹」「斑紋」を意味する言葉ができたとされる。⁽⁸¹⁾ ツァーラアト(同根の変化形を含む)は旧約聖書で五五回ほど使用されているが、そのうちの三四回はレビ記二三、一四章に出てくる。⁽⁸²⁾ その他の記述箇所をあげると、出エジプト記四章六、七、レビ記一三、一四章、同二二章四、民数記五章二、同二二章九、一五、申命記二四章八、九、サムエル記下三章二九、列王記下五章一、二七、同七章三、一〇、同二五章五、歴代志下二六章一六、二二、三三である。ツァーラアトの記述はレビ記一三、一四章に詳しく出ている。しかし、ツァーラアトは人間の皮膚だけでなく、羊毛または亜麻の衣服、布や皮家の壁にも使われている。それらが表面上、損なわれた状態の総称を表わす語で、それを一語で訳出できる用語は無いと言われる。⁽⁸³⁾ レビ記二三章にでてくる症状は種々記されている。人の皮膚に、腫れ、できもの、光るものがあり、その患部が皮より深く見え、毛が白く変わりればツァーラアトと断定される。この場合、皮膚や毛髪が白くなると繰り返し言われている。

ハンセン病専門医の犀川一夫はその著書『聖書のらい』で、「ハンセン病の特徴的な症状は、末梢神経の症状、即ち、知覚麻痺や、運動神経麻痺症状、更にそれらに起因する二次的症状なのである」⁽⁸⁴⁾とし、したがって麻痺が特徴であって、痒くはならず、レビ記にある「毛が白くなる」ことはない、と記している。十九世紀末のイギリスの著名な医師リスドン・ベネット⁽⁸⁵⁾は「レビ記には近代語のらい病に対する言及はなく、乾癬が皮膚に生じるこの状の発疹から成る類似の何か他の病気が、もっと深刻度の少ないある一つのまたは幾つかの病気に対する言及があるにすぎぬ」と『聖書の病気』(The Diseases of the Bible)の中で述べている⁽⁸⁶⁾。

レビ記一四章三には、「もしらい病の患部がいえているならば」とあるのでツァーラアトは不治の病ではない。申命記二八章二七に「いやされることはない」という病気の中に入っていない。患部がいえるという言葉は家の壁のツァーラアト(レビ一四章四八)にも用いられている。祭司がツァーラアトと鑑定すればその人や事物は不浄とみなされたが、民数記五章二ではツァーラアトと同様に流出のある者、死体に触れた者を不浄とみなして宿営の外に出すよう命じているので、汚れとか不浄を考えるとツァーラアトだけを特別視してはならない。ツァーラアトは祭司に判定が委ねられ、人の皮膚にできたツァーラアトであっても、他の病気のように「癒す」といわず、「きよめる」という。ツァーラアトが浄、不浄にかかわることが、このことから分かる。この儀式は、ツァーラアトがミリアムやウジヤを例にして罪と結びついた病であるといわれてきた。しかし、レビ記一三、一四章には罪の結果という記載はない。たしかに、ツァーラアトが癒された場合に行う献げものの儀式の一つに罪祭が記されている。だが、新共同訳に基づく『旧約聖書注解』によると、この儀式は汚れから清めるためであって、罪のためではない、とある。それは清められる(ターヘル)言、⁸⁵⁾ レビ二章七、八、一四章一〇、五三など)のであって罪を犯した場合の罪が赦される(サーラハ)言の受身形、⁸⁶⁾ レビ四章一〇、一六、三一、三五など)とは区別される。また三つの動物犠牲のうち、罪祭でなく、愆祭が他の動物犠牲に先立って重要なものとしてさざげられる。その方法も普通の愆祭の仕方ではなく、祭司の任職式(レビ八章二一、二四)と同じである。⁸⁷⁾

愆祭はおおむね知らずに犯した罪に対するものである。興味深いことに、ツァーラアトの愆祭には必ず雄の小羊(レビ一四章一〇、一一)が使われることである。ナジルびとの愆祭にも必ず雄の小羊が使われる(民数六章一一)。⁸⁸⁾ 罪祭は雄の小牛、雄雌のやぎが使われるが、羊が使われるときも、雄の小羊は使われず、必ず雌の小羊(レビ一四章一〇、四章三二、五章六)が献げられる。新共同訳はなぜか小羊ではなく、羊と訳している(レビ一四章一〇、一一)以上から考察すると、ツァーラアトが癒された場合の献げ物の儀式から罪をとりたてて論ずることはできないように思われる。

今日ではツァーラアトをハンセン病としたり、ハンセン病を含むという説をとる人は少なくなっている。それは、ミイラや墓に埋葬されている古人骨を鑑定する研究結果から明らかになったからである。たとえば、一九六二年にメラー・クリステンセンが発表した、ハンセン病しか起こさない骨の特殊な変化を鑑定する研究結果などもそのである。したがって、今日ハンセン病として知られる病気は「モーセや族長の時代、バビロンの捕囚と捕囚後にすら、聖書の土地には存在しなかったと断言できる」と言われるようになってきている。⁸⁹⁾

二、新約聖書のレブラ

λεπρα (レブラ) については、さきにツァーラアトのギリシア語としてレブラと訳されたことを述べた。このレブラという語はつるこ状の、かさぶたのある状態という意味をもっており、皮を剥ぐ、さやをとる、うるこを取る、皮膚をすりむく、樹皮をはぐ意味のレポ(λεπο)の語源からきている。⁹⁰⁾ このレブラという語は、物体や皮膚の表面に見られる汚れ、しみ、あざ、かさぶた、ふけ、斑紋などを意味するが、ツァーラアトのような浄・不浄という祭儀の意味は全くない。⁹¹⁾ 新約のレブラの個所には症状の詳しい記述がない。ルカだけが、「全身傷であわられた」(ルカ五章一二)と表現している。レブラはツァーラアトと同様の扱いをつけているように記されている。イエスはレブラの人に手を延べ、彼をきよめた後、身体を祭司に見せるようにと告げている。

次に用例の個所を記す。イエスの癒しとしては、マタイ八章一〜四、マルコ一四章四〇〜四五、ルカ五章一二〜一六、一七章一一〜一九がある。その他には、マタイ一〇章五〜一五、一一章二六、二六章六〜一三、マルコ一四章三〜

九、ルカ四章二〇〜三〇、七章二二がある。新約聖書において共観福音書以外、レブラは出てこない。レブラはツァーラアトと同じ意味合いをもっていて、異邦人には重要なことではなかったであろうと思われる。

三、誤った解釈の影響

オリゲネス(一八五頃〜二五四年頃)以来、大勢のキリスト教の作家や聖職者は、らいを罪のひとつの典型とみなした。オリゲネスは、「人々のすべての誤った見解の原因は、彼らが聖書を霊的な意味で理解せず、文字の表わすままの意味に理解している点にほかならない」という聖書解釈をしている。『諸原理について』四巻一、二。彼の方法は聖書解釈の歴史に多大な影響を及ぼし、ギリシア教父のみならず、ラテン教父にも、また中世の神学者にも受け継がれた。⁽⁹⁰⁾ 彼はレビ記の説教においても、「らい」を罪と関連して語っている。⁽⁹¹⁾ クリュソストモス(三四七頃〜四〇七年)も、マタイ福音書八章二、四の説教の中で、「罪であるらいのみを怖れなければならない」と言っている。⁽⁹²⁾ ドミニコ会のトマス・アクィナス(一二二五〜七四年)も『神学大全』(一二六六〜七二年)の中で、「家のらい病は異端者たちの会衆の汚れを表示するものであり、亜麻布の衣服についていわれるらい病なるもの、……多くの場合らい病は罪の結果である。……」と述べている。⁽⁹³⁾ このようなトマス・アクィナスの釈義は比喩的に傾いた中世の解釈を代表している。このように「聖書のらい」を罪の比喩とする説教や注解書は枚挙にいとまがない。さらに「聖書のらい」をハンセン病そのものとして説教したり注解しているものも数多くある。

同様に近代のバークレーやケロックは、罪の比喩とともにハンセン病そのものとして注解している。⁽⁹⁴⁾ ハンセン病者の施設名に「ラザロの家」とか「ラザレット」、「ラザリン」と付けられている。ベタニヤのラザロ(ヨハネ一一章一〜六)あるいはできものができて物乞いをしていたラザロ(ルカ一六章二〇)の名をとって名付けられ、特にベタニ

ヤのラザロは同じベタニヤの「らい病人シモン」(マタイ二六章六、マルコ一四章三)と結びつけて、「らい患者の守護聖人」にされたという。⁽⁹⁵⁾ また、ハンセン病になると、生きながらにして死者と見なされる模擬埋葬の儀式が行われた。これは教会の典礼書の中に「ライ患者を現世の外におく方法」に基づいたものである。⁽⁹⁶⁾ このように誤った聖書解釈がハンセン病の差別と偏見を助長したと言える。

結論

この論文で論証したのは、「聖書のらい」はハンセン病ではなく、また罪の譬えとして語る解釈は必ずしも適切でないということである。

本論一章では、ヘブル語のツァーラアトがギリシア語のレブラに翻訳され、さらに、ラテン語、英語その他の各国語に訳される過程で、医学名としてのレブラと同一視されていったために、ハンセン病との混乱が起こったことを示した。

二章では、ヘブル語のツァーラアトとギリシア語のレブラの意味と用例の中から「聖書のらい」は、ハンセン病ではないことを述べた。

特に今世紀半ばになって、医学的にはハンセン病が完治する病気となり、古人骨を発掘調査した結果、聖書のツァーラアトの書かれた時代には、ハンセン病はなかったことが定説となった。さらに、聖書学者やハンセン病専門医の見解から、「聖書のらい」はハンセン病ではないと認められるようになった。

これを受けて、現代の英語聖書の中には、但し書きや表記の変更がされている。日本でも本年(一九九七年)四月に発売された新共同訳の小型聖書からは、「らい病」、「らい病人」の表記はなくなった。日本聖書協会の発表によると

差し替えられた「重い皮膚病」、「皮膚病」、「かび」は適切な語句があるまでの暫定的なものだとしている。今後印刷される「口語訳」も「文語訳」も同じ表記に替える予定であるとのことである。

この新共同訳以前の訳では、委員会訳もほとんどの個人訳も「癩病」あるいは「らい病」と訳されてきた。そのため旧約聖書から誤った解釈の結果、罪の譬えとして語られてきた。このことはハンセン病を病んだ当事者や関係者を苦しめてきた。

聖書から「らい病」の語が消えることによつて、ハンセン病の差別と偏見の元凶は聖書と二千年のキリスト教会にある⁽²⁵⁾と言われる汚名を徐々に返上できるであろう。注解書や聖書辞典類も書き換えられる日もそう遠くない。そうなれば、「らい病」を罪の譬えとして語るといふこともなくなるわけである。

注

*この論文は大阪キリスト教短期大学神学科(専攻科)に提出した卒業論文をまとめ直したものである。

一章

- (1) 門脇清・大柴恒『門脇文庫日本語聖書翻訳史』、新教出版社、一九八三年、三八一頁。
- (2) 佐藤邦宏『バイブル・ロード』、聖書の通ってきた道、教文館、一九九二年、一〇七―一〇八頁。
- (3) *The Septuagint*, Samuel Bagster and Sons Limited, London, 1794.
- (4) 犀川一夫『聖書のらい』、新教出版社、一九九四年、二二七頁。
- (5) スタンレー・G・ブラウン『聖書の中の「らい」』、石館守三訳、キリスト新聞社、一九八二年、二五頁。
- (6) 『聖書の中の「らい」』、前掲書、二八―二九、四一頁。『英和大辞典』(研究社、一九六三年)の九八頁を見ると、*elephant*に付いている語尾 *asif*は「病名のキリシヤ系古語尾」とある。従つて、*elephantiasis*(象皮膚病)はキリシヤ時代からの病名。
- (7) 『聖書のらい』、前掲書、九六頁。

- (8) 『聖書のらい』、前掲書、一一一―一一二、二二七頁。マラヒヤ医書とはフィリヤ病を象皮膚病と呼んでいたため、マラヒヤ象皮膚病はフィリヤ病を指し、ハンセン病はキリシヤ象皮膚病(*Elephantiasis*, Greece)と呼ばれていた。
- (9) 『キリスト教大事典』、教文館、一九六三年初、一九六八年改訂新版、一三三頁。バルバロ、テル・コル、『旧約・新約聖書』、ドン・ボスコ社、一九六四年の全聖書序論二六―三〇頁参照。
- (10) 『聖書のらい』、前掲書、五六頁。
- (11) 『聖書』、前掲書、二二頁。
- (12) *BIBLA SACRA LATINA*, (Vulgate) Samuel Bagster & Sons, Ltd, London, 1794 (quasi leprosum) とこの語が入っている。
- (13) 『聖書のらい』、前掲書、五七頁。
- (14) 『聖書のらい』、前掲書、五八頁。
- (15) *Holy Bible* (King James Version) 1611, 1985 (p.) 464の *The Bible* (Authorized Version) 1954, 1959 (p.)
- (16) *The Bible* (Revised Standard Version) 1881-1885 and 1901, 1952(p.)
- (17) *New English Bible* (Zwa) New Testament, Oxford Cambridge Uni.Press, 1961.
- (18) *HOLY BIBLE* (Zwa) Thomas Nelson& Sons, 1901, 1929
- (19) *THE BIBLE* (Mofatt) Hodder & Stoughton, 1957.
- (20) 『聖書のらい』、前掲書、四六―四七頁。
- (21) *Die Bibel* (Trans. By D. Martin Luther) P.W.B. Stuttgart, 1912 (p.)
- (22) 『クラウン独和辞典』三三頁、一九九一年、一九九六年(第十三刷)、二二八頁。
- (23) 日西対照『新約聖書』日本語：新共同訳、スペイン語：Version Popular NUEVO TESTAMENTO, 日本聖書協会、一九八八年、およびフランス語：民八十周年記念出版、日西対照『新約聖書』詩篇の新共同訳、NOVO TESTAMENTO e SALMOS, 日本聖書協会、一九八八年。
- (24) 中国への聖書頒布用(簡体字)で、旧新約全書と書かれている。奥付はなし。
- (25) 『聖書』、一九八四年に公認と発行されたものである。
- (26) 『聖書のらい』、前掲書、六五―六五頁。

- (27) 諸橋轍次『大漢和辭典』巻七、大修館書店、一九五八初、一九六八縮寫版二刷、一一八〇頁。
- (28) 韓国で発行されたハングルの聖書、一九五六初、一九八四年には、MUN DUNG BYEONG(らい病)とある。
- (29) Hebrew New Testament, United Bible Societies, 1976, 1980(rp).
- (30) 『ブリタニカ国際大百科事典』十九巻「癩」、TBSブリタニカ、一九七五年、八七三―四頁。
- (31) 海老沢有道『日本の聖書』、講談社学術文庫、一九八九年、一〇六―一〇八頁。善徳纂『約翰福音之傳』の復刻版が一九八四年初に岩崎撰子によって桜楓社から発行されている。
- (32) 『日本語聖書翻訳史』(門脇文庫)前掲書、三五―一五〇頁、および海老沢有道『最初の邦訳聖書』(キョウツラフとベッテルハイム訳聖書 天理図書館本解説)雄松堂書店、一九七七年参照。
- (33) 『日本語聖書翻訳史』、前掲書、一五七―一八八頁。
- (34) 『HOLY BIBLE 舊新約全書』、英国聖書會社、一九〇六初、一九一四年(七版)。
- (35) 『日本語聖書翻訳史』、前掲書、一八八―二〇四頁。
- (36) 『舊約聖書(引照付)』(二三三六頁)、日本聖書協會(神戸)、一九三四年、および『HOLY BIBLE 舊新約全書』、前掲書。
- (37) 『聖書のらい』、前掲書、五九―六〇頁。
- (38) 『舊新約聖書』、米國聖書協會、一九三五年(昭和十年)。
- (39) 『聖書』、日本聖書協會、一九五四初、一九八二年。
- (40) 『新約聖書』(共同訳・全注)、講談社、一九八一年、一九九一年(七刷)。
- (41) 『聖書』(新共同訳)、日本聖書協會、一九八七年、一九八八年、一九九一年(再刷)。
- (42) 木田献『「聖書新共同訳発行一周年にあたって」』、聖書翻訳研究、二十五号、日本聖書協會、一九九一年、十四頁。
- (43) 『クリスマン新聞』、一九九七年三月十六日付。
- (44) 『聖書』(新改訳、注・引照付)、日本聖書刊行会、一九七〇年、一九七五年(六刷)。
- (45) 『リビングバイブル』、いのちのことは社、一九七八年。
- (46) 『詳訳聖書』(新約)、詳訳聖書刊行会編、いのちのことは社、一九六三年。
- (47) 永井直治訳『新契約聖書』、基督教文書伝道會、一九二八年創刊、一九七一年(修正改版第二刷)。
- (48) 『新約聖書』(口語訳)、キリスト新聞社、一九五二年。
- (49) 塚本虎一訳『福音書』(岩波クラシックス十九)、岩波書店、一九八二年。
- (50) 『希和对訳・新約聖書』(岩隈直訳)、山本書店(マルコ)一九七三年、ルカ・一九七八年、マタイ・一九八九年。
- (51) 『旧約聖書』(関根正雄訳)第一巻「律法」、教文館、一九九三年。
- (52) 『新約聖書』(前田護郎訳)、中央公論社、一九八三年。
- (53) 『新約聖書』(柳生直行訳)、新教出版、一九八五年、一九九四年(五刷)。
- (54) 『新約聖書 福音書』(佐藤研・小林稔訳)、岩波書店、一九九六年、補注二七―二八頁。
- (55) 『聖書』(尾山令仁訳)、羊群社、一九八三年。
- (56) 『我主イエス・キリストの新約聖書』(エ・ラゲ訳)、中央出版社、一九一〇年、一九五二年(十四版)、『日本の聖書』、前掲書、三五九―三六〇頁。
- (57) 『旧約・新約聖書』(バルバロ・テル・コル訳)、ドン・ボスコ社、一九六四年、同書的全聖書序論三四頁参照。
- (58) 『新約聖書』(フランシスコ聖書研究部訳)、中央出版社、一九八五年(改訂初版)。
- (59) 『我主イエス・ハリストスの新約』(ニライ訳)、一九〇一年、一九六一年(再刷)、『日本の聖書』、前掲書、三六四―三七五頁。
- (60) 『大漢和辭典』巻七、前掲書、一一〇九頁。
- (61) 山本俊一『日本らい史』、東京大学出版會、一九九三年、一―二頁。
- (62) 『聖書のらい』、前掲書、五七―五九頁。
- (63) 『実用聖書注解』、いのちのことは社、一九九五年、一九六頁。
- (64) 『THE HOLY BIBLE (NIV)』、International Bible Society, USA, 1973, 1978, 1984.
- (65) 『Good News Bible (NIV)』、American Bible Society, 1971, 1979.
- (66) 日本聖書協會・理事長・吉田信一あて、日本基督教団東中国教区総会議長・横野朝彦、一九九六年七月九日付文書。同様な文書が、日本聖書刊行會理事長、日本基督教団総会議長、日本キリスト教協議会議長にも出された。

- (67) 日本聖公会(八代宗首座主教)『らい予防法』廃止とそれに伴う十全な措置を求める宣言、一九九六年五月二十三日、日本聖公会第四十九(定期)総会。
- (68) カトリック司教協議会(濱尾文郎会長)一九九六年四月十一日付。
- (69) 『クリスチャン新聞』一九九七年三月十六日付、一頁。
- (70) 『聖書』(新共同訳、小型版)日本聖書協会、一九九七年。
- (71) 『クリスチャン新聞』一九九三年四月十一日付、一頁。
- (72) 千代崎秀雄「歴代誌」(2)実用聖書注解、II 歴代二六の二六―三三)いのことば社、一九九五年、四八五頁。
- (73) 三野孝「レビ記」実用聖書注解、前掲書、一九六―一九八頁。
- (74) J・R・ポーター「レビ記」ケンブリッジ旧約聖書注解 3、樋口進訳、新教出版、一九八三年、八八―一〇七頁ほか。
- (75) 日本福音同盟委員長(山口昇・社会委員長油井義昭)よりの文書、一九九二年九月十日付。
- (76) 日本福音同盟理事長(舟喜信・社会委員長村瀬俊夫)一九九七年六月二日『らい予防法の廃止に関する法律』の制定を受けて。『クリスチャン新聞』一九九七年六月二十二日付。
- (77) 真宗大谷派宗務総長(能邨英士)「ハンセン病に関わる真宗大谷派の謝罪声明」、一九九六年四月五日。
- (78) 『らい予防法』廃止とそれに伴う十全な措置を求める宣言、日本聖公会、一九九六年五月三日。
- (79) 日本基督教団東中国教区総会議長・横野朝彦、一九九六年七月九日。
- 二章
- (80) 『聖書の中の「らい」』前掲書、一丁―十三頁。
- (81) 『聖書の中の「らい」』前掲書、十九―二十頁およびW・エフシュタイン『旧約聖書の医学』、梶田昭訳、時空出版、一九八九年、七二頁。
- (82) *Biblia Hebraica Stuttgartensia*, Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 1967, 77, 90.
- (83) 『聖書の中の「らい」』前掲書、八頁。
- (84) 『聖書の中の「らい」』前掲書、二十一頁。
- (85) Sir. Risdon Bennett 医学博士、文学博士、英国等士院会員、一八八六年に著した *By-paths of Bible Knowledge*, vol. ix, *The Diseases of the Bible* に於いて有力に主張された意見としてケロツクは自著『レビ記』で紹介している。
- (86) 加納政弘「レビ記」新共同訳・旧約聖書注解Ⅰ、日本基督教団出版局、一九九六年、二二一―二二三頁。
- (87) 『世下社一全集』第八巻、中央出版社、一九六二年、十頁および『聖書の中の「らい」』前掲書、一五―三〇頁。
- (88) 『聖書の中の「らい」』前掲書、三六頁及び、岩隈直『新約ギリシヤ語辞典』、山本書店、一九七一年初版、一九九三年増訂四版、二八三頁。
- (89) 『聖書の中の「らい」』前掲書、一七―一七頁。
- (90) 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史』、日本基督教団出版局、一九八六年、一三三―一三七頁。
- (91) Origen, *Homilies on Leviticus, THE FATHERS OF THE CHURCH*, Homily 8, Washington, 1980, pp. 160-168.
- (92) Saint Chrysostom, *Homilies on the Gospel of Saint Matthew, NICENE AND POST-NICENE FATHERS*, Vol. X, Michigan, 1989, p.173.
- (93) トマス・アクィナス『神学大全』十三巻II、1、稲垣良典訳、一九九四年、三〇六―三三三頁。
- (94) W・パークレー『聖書註解シリーズ』一・三、四(マタイ、マルコ、ルカ)一九六七年、ヨルダン社および S・H・ケロツク『旧約聖書註解レビ記』、榊原康夫訳、聖書図書刊行会、一九六五年、一九九〇年(四刷)、一三六―一四四頁。
- (95) 『聖書の中の「らい」』前掲書、四八頁。
- (96) 『世下社一全集』前掲書、四五―四六頁。
- (97) 『ハンセン病の歴史を考える』(皓星社ブックレット・2)一九九五年、三三頁。世界失明防止協会副会長のW・G・ホームズは、「レプロシーは恐ろしい病気で、遠ざけねばならない」という欧米社会の偏見は、実は、バイブルとキリスト教会が二千年にわたって、人々の心に植え付けたものだ」と述べている。

引用文献目録 前記の「注」をもってこれに替える。